

## 2 教講一体のご弘通

以上の代表的なご信者とお教務のお話を掲載致しましたが、これらの菩薩のご奉公の具体的なあり方こそ学ぶべき所なのではないでしょうか。

どのお寺にも、特に草創の時期には必ず、強烈な日厚上人のような御導師や村田さんのような強信の方が何人もあったはずですし、現在も又、沢山にあると思います。けれども、どうでしょうか、そういう典型的な佛立教務と講務の強烈な目の醒めるようなご奉公は、昔と比べたらやや減少の傾向にあるのではないのでしょうか。

どうしても、お寺にしても、組や部にしても草創の頃は、誰もが弘通意欲に燃えて、教務さんもお信者も一体となってお奉公が展開されます。けれども、時代がたち、安定期に入りますと、信心の形式はあっても注意をしないと惰性に流れ、形骸化をすることになります。

同じ佛立信者の家庭であっても、初代の自らが当宗のご信心に入信をした方と、2代目、3代目では、全部が全部ではありませんが、道を求める求心力がどうしても減退をしてくるでしょう。お教務方にしても、先代のお導師のお徳をいただかれる二代目、三代目の方ともなりますと、よほど注意をして頂きませんと、やはり強烈なものは失われてくることもありうることです。

まだそうはなっていないのが救いですが、昔の教講一体のご弘通から分業化され、教務方は儀式の専門の執行者、ご信者はただ外護のみに徹する庇護者となって参りますと、問題が起ってきます。宗教団体から宗教性が喪失されてしまうのです。そうならないためには、この四信五品抄の精神を失わないように、2代目であっても、3代目であっても、初代のご信心前を見習い、初代のもりで経力、現証の信心を吾がものとしなくてはならないのです。

確かに時代は大きく変わり、医療も進歩し科学的知識も昔に比べれば飛躍的に普及しています。ですから、ご利益を求めて病気が縁で入信する人が減ってきているよう

に確かに見えます。昔より現証利益で病気が治るといっても信じない人は多いと一応いえるでしょう。

でも、明治時代でも大正でも病気を信心で治ると考えている人はそうは多くなかったのです。それでも、教講一体となって病気平癒のお助行に励み、教化をしたのです。それに、横浜でお風呂屋さんであった人が急に神憑りになって始めた新興宗教、「山のNのM」なる宗教は20年前に急成長、病気もそれもさわれば治るという力が教祖にあるという触れ込みで全国から飛行機で月に一度必ずくる人がかなりあるとのことです。教義も何もあったものではなく、ただ病気が治るという噂、あるいは口コミだけでかなりひろまったのです。

だから病気をきっかけとしてご信心を勧める方法は今もって、決して時代遅れではないと思います。ただ、それだけではなく、人間関係の悩みやその他の事で入信を求める人も多くなって、動機は多様化してくるに違いなく、その対策も考えなくてはならないということと言えます。

ですから良く考えてみますと、現証を信じない度合いが多くなったのは、一般世間の宗外の人ではなく宗内の人々で、形式上の法灯相続者が多くなったのが原因です。だから、本当の法灯相続者が増加するよう努力しなくてはなりません。

又、もう一つ、形骸化の傾向が多少あるようですが、その原因はご弘通のロマンを私たちが自分で萎ませてはいないかということです。病気が縁で入信しても、精神的な悩みが動機でも、高尚な哲学的な思索の結果であっても、法華経本門のご信心をさせていただく人が増えることによって、日蓮門下の諸門流が佛立宗に統一されひいては、諸仏教が佛立宗に帰伏することが佛立講の明確な明日の実現可能な目標として考えられていたのです。一言で云えば、心の底から一天四海、皆帰妙法、全世界が妙法のご信心に包まれるという壮大なロマンに胸ふくらませてご奉公をさせて頂いていたと言えると思います。

今は、昔の人に比べ宗門なり御法という絶対的存在を相対的に、他教団との比較に

において客観的に見つめるという姿勢になっている方もあるようです。宗教家でなくてはならない人たちが宗教評論家か宗教学者化をしています。

宗門の軍国主義への傾斜と敗戦、雨後の筍のように新興宗教が発生、それぞれが力を伸ばしてきただけでなく、新宗教、新々宗教でも相当に発展する教団が輩出をしています。

新宗教、新々宗教はマスコミやテレビまで利用をしている（既に衛星放送のチャンネルを立正佼成会や阿含教団では取得をしている）ばかりでなく、教学の研究所でも立派な施設と組織を備えて取り組んでいます。あるいは公明党の創価学会はもう、いつのまにか社会的に認知をされた政党として公の場で力を発揮しているようです。

情報化が進み、映像や出版物でそんな他宗の発展している姿を見て、私たちがロマンをなくしてしまっていたなら大変なことです。ある御導師が以前に、大放光に書かれていましたが、その言葉に私は勇気づけられました。「末法は万年続くのだから、いわば謗法の諸宗との法戦は始まったばかりなのだから、吾が佛立宗はこれからである」と。

道理（合理性、理論）、証文（経文の上での証拠、文献の裏付け）、現証を三証といい、宗教の真実性を検証する方法として御祖師様が提唱をされましたが、この三証を具足し、全部そなえているのは佛立宗だけなのですから、いつか真実の教えのみが残り、他は滅びるのです。本門八品所顕上行所伝の御題目こそ最高の御法で、この御法以外で人が救われることはありませんなのですが、その最大の当宗の誇りをあるいは人によっては忘れかかっているのではないのでしょうか。

以上のような事を考えてみますと、時代が変わったから教化が振るわないというのは、どうやら私たちの言い逃れのような気がします。

あらゆる組織も必ず、草創期から発展期へ、さらに現状維持の状態を経て形骸化、壊滅へと向かうといわれています。もし、そんなことが佛立宗に当てはめられては、真実の御法を伝える唯一の宗門が途絶えることとなり、これほど勿体ないことはなく、

み仏や御祖師様に申し開きができないことはありません。

そこであってはならないことですが、最悪の場合、当宗が形骸化の道をご他聞にもれずに、もし歩んでしてしまった時の姿を想像してみましよう。その時はどのような状態かということ、四信五品抄の精神と正反対の状態で

- 1、教講ともに口唱、折伏、教化をせず現証を頂こうともしなくなっている
- 2、教講に謗法觀念がなくなり、謗法を犯していても平気になっている
- 3、教務、講務が利害を異にして敵対している
- 4、御法の絶対性を信ずる人がなくなり、儀礼と施設とお墓によってのみ教務と講務が結び付いている（開導聖人以前の時代のお寺、すなわち葬式屋に舞い戻っている）
- 5、教務と講務の間が絶対的なものとなり、講務では寂光参拝、成仏ができないという教義に変わってしまっている
- 6、法灯相続が血統相続となり、本山の貫首は世襲制となる
- 7 お寺が相当な財力を持ち、多角経営をして利潤を追求して、ご信者をアテにしなくなっている

他にもいろいろあるでしょうが、これらは実は既成仏教の宗団の姿です。私たちの先輩の教務方とご信者はお互いに助け合い、共にお助行で汗を流し、御利益を頂いて参りました。それは、専門家である教務と仕事は持っているが献身的にご奉公をされる講務の間には本質的な差はなく、

「真実の出家といふは菩薩也 御法弘めて人を助くる」（御教歌 1485）という、開導日扇聖人の教えに基づくものです。

そこで、出家と在家とはどのような差異があるのか、どの様にとらえれば良いのか問題となってきます。実は、在家と出家の問題こそ、宗教性の喪失、形骸化と宗教性の復興の繰り返しとなってインドの釈尊の時代から、そのご入滅後、仏教が中国、朝鮮半島、日本へと伝わってくる間の仏教の歴史となって現われてくるのです。